

だが、山國の斷崖に野生して、急湍に臨みながら、火の如くに咲いて、山風に香を播き、蕩するところは、いかにしても熱情の花である。『蝶多き御嶽の道や山脚躑』併し昇仙峽の躑躅は、紫の花が多い。

▲故子規氏が選擇したと聞く『新俳句』といふ本を瞥見して會心の句を抄いたことがある、その中春と秋の花に關したものに、戯れに短評を加へてみた、たゞし余は句作には素人であるから、一切技術上の評はしない、只だ何となく自分の氣に入つたものだけを探つて、即興の蛇足を加へたまでのことである。

侍の野梅折りけりちとしざし

子 規

故人權十郎の俤が偲ばれる。

神體もなま古宮の椿かな

若 苦

自ら萬古の意を生ず。

紅梅に吊瓶よこたふ伏家哉

鶯 白

紅梅といふと、その濃艶なるが故に、姫君、宮女、傾城、妾などに多く配合せられるやうであるが、むづかしい藁屋にこの花を看るのが、亦格別の趣がある、この句はか

つて、余が武州多摩上流の藩の、百姓家の光景を、余に代つて寫生してくれたのでないかと感じた。

家十戸菜の花の村皮をなめす

森 々

菜の花の匂ひは、皮の臭ひをかきけしてしまふ。

桃咲いて牛の乳搾る女かな

戯 道

この女は、無論少女で、そこを白馬に跨がつて通りかゝる若様が、見惚れる、そこで小説が出来やうといふものだ。

僧二千櫻の中の鐘供養

墨 水

時に白拍子訪ひ来る、名は花子。

門前の花屋の檜咲きにけり

麥 人

何人も看るの景、何人も道はんと欲して未だ道はざるの景、墓や地藏の檜は、もう陳腐である。

藤さくや一膳飯を賣る小家

破 笛

もう晝だぜ、ウンと詰め込んで往かうぢやないか、吾輩の貧乏旅行、往々如是。

かたまりて菫咲きけり草の中

虚子

菫は花の中で小さなもの、十七字は詩の中の小詩形、しかもこゝに至りて、菫ほど美くしい花はなく、俳句ほど美くしい詩はないかとおもはれる。これから秋の部に移つて

あはれなる名かな花かな女郎花

春園

一字も増す能はず、一字も減する能はず、女郎花の讃として古今獨歩であらう、やがてこれ、有らぬ秋の花の詩經である。

山萩の馬に喰はれてまばらなり

碧梧桐

秋惨として暮れなんとす、馬に喰はれた山萩、これ書題に可ならずして、獨り詩題に入るべきもの。

曼珠沙華寺に咲くべき名なりけり

若苔

花も亦寺臭い、且つ印度的なところがある。

咲くまではむつと閉ぢたる桔梗かな

五洲

この花のつぼみの特色を、事もなげに言ひ表はしたところが子供じみてゐておもしろ

S。

瘦村の川一筋を野菊かな

半石

瘦字下しえて全景が活きた。

尼寺や古き井桁の花薄

紅緑

西洋人もどらくは、この趣味を解すまい

月暈あり鶏頭の影化けぬへく

露月

横山大観畫、泉鏡花作。

▲去年の八月、信濃の八ヶ嶽へ登つて、偃松帯の直下に山櫻の滿咲してゐるのに驚いた、しかしこのとき、生れてはじめて「山櫻」としての特性と趣味を肯いた。

▲菫を姫君に比べると、菜の花は田舎娘といふところであるが、余は春の花の中、最もこの菜の花を愛するのである、田園の春に菜の花がなかつたならば、それは代表花を失つたが故に、もはや春でないといつても過ぎぬであらう。

▲平原人士が、石楠花の趣味を知らずにゐるのは、氣の毒だ。

▲捏ねかへされた田の土などに、五形花が、簇がつて咲いてゐるときは、美しくしなと

のたから、繪の具をぶちまけて、それが花と化現したかのごとくである、春の田畦を歩くと、農夫ほど、花の恵みに親しむものはないと、熟くおもふ。

▲手紙に封じて『此是東山一片春』（竹外の詩）と紀念に送るのは梅の花が似合はしいが、書の間袂に挟んで藏つて置くのは董がいゝやうだ、何故といふ理由もなく、單だ何となく調和する氣がする。

▲『大原や蝶の出て舞ふおぼろ月』この寥々たる十七文字の廣袤と、奥行を測つてゐる間に、有りとも有らゆる春の花が、眼前に泛んで来て、そこらに幻が溢めき出る、花といふ字がなくて、しかも千萬の花の字を累ねても及ばぬ境地を占めてゐる。

▲『願はくは花の下にて我死なむ』人情千萬態なりと雖も、妄執はこれである、あゝ妄執は是れのみ。

## 十二 四季の花木

友人伊良子清白、四季の花木を論ず、極めて清新、曰く『春の花は木が多くて草が少い。木も小高いのが多い、夏、秋になると草が多くなる。春は天象に重さをおいて地相に

注意せぬ。霞、おぼろ月、春の曙、長閑けき空、これ等に調和するものは必ず仰首の位置になくはならぬ。これが春の花に木が多い譯で、それに春の樹木は葉がないか、或は芽立ちて小さいからして、夏、秋のやうにはなく花を着けるに頗る適當してをる。梅、桃、杏、林檎、玉蘭、迎春花、連翹、海棠、櫻等主なるものである。秋は露といふ可憐の景物、蟲といふ斷腸の音響、これには是非地上の花でなくては都合が悪い。秋の七草は申すに及ばず、蕎麥、水蓼、菊、鳳仙、千屈菜、文珠蘭、金線草、雞頭、千日紅、秋海棠、千鳥草、地榆、龍膽、等「千草八千草」で、とても數へきれぬ。夏は暑氣といふ強敵の爲に、外出が出来かねる所から花は水邊、早朝、黄昏、樹陰等に榮える、初夏の藤、燕子花、玉簪花、溪蓀から蓴菜、河骨、澤瀉、雨久花、薺草、中夏になれば蓮、これは水邊の産、朝顔、蓮、これは早朝。夕顔、玫瑰、月見草、紫葳は黄昏に適して居る。七葉樹、栗、柿、合歡、は山間又は野徑に開花して旅人の憩陰となる。また出遊の少いので庭園に趣味が多くなつてくる。夏の花は庭園に植ゑてよゝいが多い、牡丹、芍薬を魁として、沙疏、薔薇、アヂササ、柘榴は梅雨に適し、桐、杜鹃花、墨子粟、虞美人花、各種の百合、向日葵、木槿、鐵線花、夏枯草は炎天

によい、冬は常緑樹の節操を見る時季で、花に茶梅チャマンボウはあるがいふに足らぬ。春の花が天象と調和するといふ説に、も一つ有力な證據がある。春は樹木もまだ繁茂はせず、雑草の青みも淡い。一跡が大まかて、人間ていへば原人の面影があつて複雑してをらぬ。て春の花は眼に近く仔細に見る筈のものではなく、遠望するか近くて見ても、手に取る迄にせぬ。この大まかな所、小細工のない所が大きに天象の雄大と調合する譯で、菜花の一目瀾望金を布くのも、げんくの毛氈を擲げやうなものも、人工に種を下ろしたのものにもせよ、俗に一目千本といふて珍重する月ヶ瀬の梅、一面に咲き續いた桃林、これらは夏、秋の景色にない所だ。櫻を櫻。雲十里といふ、大和言葉では花の雲といふ、櫻花が善く春の位置を守てをるといふことは分る。』

### 十三 余の好める色彩

余はどの色でも嫌ひはない、が殊に淡い色は皆好きだ。只だ淡いといふと、漠然としてゐるが、たとへば白でも梅のやうに、雪のやうに、水仙のやうに明瞭な色よりは、曉の空の色の、卵の白味のやうにぼつかりとしてゐるが好ましい。赤でも曼珠沙華の

やうな、濃い、諄いのは厭だ、先づ日が没して、夕榮の名残の雲が三段流れに遠山になびいてゐる、その色が一刺毛にも消えさうに想はれて、おぼつかない、が萌黄でなく、桃色でもなく赤、ほど濃くはなく、金ほどシッコくないところが酔である、珍重である。紫も、杜若や菖蒲の色より、矢張夕暮の雲が、ぼんやりと薄紫の薄紗を、山や樹木や畑に冠するところに神韻縹渺たるおもむきがある。虹の色などは、この淡いといふ點から最好きなので、必ずしもその七色中の何に執着はせぬ。富士山は好きといふよりも、寧ろ崇拜の心を以て眺めるが、それも晝の富士よりも、朝とか、夕とか、月夜とかのがよい、白晝は明瞭に過ぎ、單趣に失するが、朝夕夜はどことなく大まかて、茫として、意趣があり、神秘があり、歌も詩も皆こくに包まれてゐる。以上を引括めて、更に平たくいへば、白又は紫などと明に指すよりも、『白味がかつた』『紫がかつた』といふ不即不離のところの玄妙である。

### 十四 落葉の趣味

ふと目醒めて、我は窓にあらずやと疑ひぬ、屋根を撲つ音、はら／＼として穴も明く

らむやうに、一種氷冷の氣厚を透すを覺えたりしが、睡魔に覺にそれとも知らず過ぎたりし、今朝戸を開くるに及びて、満庭に梅の葉、櫻の葉、山吹の葉、楓の葉、茜に、黄色に、褐色に、赭色に繪の具をぶち蒔けたる如く、足の踏み入るところもなし。

庭下駄穿きて門に倚る、門左に孤立せる榎の大樹、風に揺られて葉の舞ふものは幾里、鮮やかに水の如き虚空に泛び出てたる富士大山の巔を上へ下へと飄遊して、咄々怪事ならぬあやしき文字を描きつゝ、ばざりと脚下に落つ。

振り仰げば葉の落つるは、言ひ合せたらむ如く、若干の時を措いて一葉ひらりと飛び下りたるかともへば、又梢を手放してついと飛ぶ、別れを惜しめる殘葉は、その度毎に、右に左に梢を振り子の如くに動かして、どよめきの聲を擧ぐ。

歸れば椽側の手水鉢、今朝俄に魚の泳げるあり、南天の葉に喰ひ止められて、兒手柏の如く累なれるものあり。懐をさぐれば知らぬ間に潜める一葉あり、袖珍の詩本にあらずやと疑はる。

夕暮に至ればこの頃の空は、炎煙火柱、天を衝いて眼を爛らんとするを常とす、こ

の時晏々如として土に歸へる榮えのいかばかり、偉なるかを我に示して朝な夕な、落葉、落葉、又落葉。

## 日本山水論 終

明治三拾八年六月貳拾五日印刷  
明治三拾八年七月七日發行



隆文の検印あり

著者 小島 鳥水

發行者 平山 勝熊

印刷者 佐久間 衡治

印刷所 株式會社 秀英 舍

東京市京橋區四番屋町廿六七番地

東京市京橋區尾張町壹丁目壹番地

發兌元 會社 隆文 館

日本水論史附

定價金一圓三十錢

小島烏水著  
不二山

既刊 定價四十錢

三宅克己畫伯筆不二山(コロタイプ版)不二山頂亂雲の寫眞(コ  
ロタイプ版)著者筆不二山頂噴火孔説明圖(石版)三葉挿入  
四六版形崇高彩美の新式製本

發行書肆

東京市日本橋區  
上槇町十番地 如山堂書店

右は不二山、及び富士の裾野、山麓の火山湖、青木ヶ原の森林、甲斐の高岳金峰山等、著者が數年間歷遊して獲  
たる、紀行稿本を萃めたるものにして、殊に山頂雲の變化を寫生したる文は、最も著者が力を盡くしたる長篇な  
り、且つ添ゆるに登山案内、不二山研究に資する書籍圖鑑等を以てしたれば、世の愛山家に讀まれむことを希  
望す。

隆文館新刊圖書

人體畫法

東京美術學校教授 岡田三郎助先生校閱  
川崎安先生新著

定價金九拾五錢  
小包料金拾錢

製本金緣金銀模  
樣表紙意匠印刷  
本表紙來紙印刷  
繪文參考名畫入  
明畫數十葉挿入

天には星、地には花、中に位して其の妍を争はんとするものは人體の美に非  
ずや彼の洋畫が人體畫を以て其根底となすもの誠に其の以ありと謂ふべき也  
されば苟くも繪畫の事に従ふものは先づ人體の研究に悉しうして以て其の堂  
奥に上るの準備となさざる可らず本書は川崎安先生が多年の蘊蓄を傾け盡し  
て著作せられたるものと更に現今洋畫界の泰斗たる東京美術學校教授岡田三  
郎助先生が歸朝以來、中等教員木炭畫指導に於ける數回の經驗に鑒がみ嚴正  
周密なる校閲の勞を賜はりたるものにて學畫の入門となすべく、以て畫界の  
津梁となすべし。藝術に志ある者は必ず讀まざる可らず

發行所 東京市日本橋區尾張一丁目合資隆文館  
電話新橋二五八六番

告豫刊近館文隆

謹告

泰西文學の中、散文の譯出されたるは多々あれども、詩文に至りては未だし、たゞこれあらば、あまりに原文に泥みて詩趣を没却したるもの、あらずんば、譯文調、和文調、語意疎離にして、然るものさへあり、今本館が發せんとするはこれと異なり、知名の文士諸君に屬して、その私淑せる四詩人の集中より、最も優れたるもののみを採りて、意譯に偏せず、直譯に流れず、借俗ならざるものなり、覆轍の間、四時之美と人情の美とは、詩に依りて發揮せらる、大方の諸君子常にこれを吟誦して、趣味を涵養せられんことを期す。

浦瀬白雨君譯

ナーツナーズの詩

詩集式新形製本  
定價未定

田山花袋君譯

キーツの詩

全

片上天絃君譯

テニソンの詩

全

緒方流水君譯

ロングフェローの詩

全

告豫刊新きがは繪

謹告

あるは海濱に、あるは幽谷に暮を避くるの時、目に見、耳に聞く景色と、情趣と、感想とを記して、かの地の地に離れん、の友垣に寄するこぞに興多きわざなれ。されど、これをし、もし普通のながきや、有り觸れたる繪はがきを以てせばいかに、その趣味を感ずること、益し渺からざらむ。本館これを思ふて、茲に文壇知名の大家に請ひ、その意匠に成る繪畫はがきを作る、そのいかに雅致あり、涼味に富みて、他の群繪はがきと異色あるかは、時ふ、近き發刊の日を待ちて知れ。

宮川春汀君畫

新

粧

アルバム付六種  
定價各未定

伊藤銀月君意匠

山

水

一組六枚  
定價未定

田口掬汀君意匠

海

水

浴  
一組六枚  
定價未定

田口掬汀君意匠鑄木清方君畫

繪はがき女夫波

一組六枚  
定價未定

書圖刊新館文隆

版三ち忽評好大

徳田秋聲君新作 ● 口繪木版四十度刷

宮川春汀君畫

小説かこひもの

總クローリス金銀文  
字模鑿入粹麗美裝  
定價金六十五錢  
郵税金八錢

人生婦女子と爲る已に不幸也況やん男尊女卑の似而非道德に規るゝ東洋に生るゝに於て飄零落魄日に愛せらるに捨てら圍ひ者於てなれるに世人等は汚れたる一面のみを見痛罵らんとす知らず渠等亦人七情を解して涙ある通常人と異ならざる通常人以上哀苦痛苦し抱無言の中無量の血涙熱涙を藏とる著者秋聲子は當代の作家中一深刻な人生觀を抱いて常に弱者の爲に萬斛の涙を濺ぐ人今茲得意の材を得想を構ふ彩筆縦横讀者を悦惚しめ遂に子が女性觀に同せしめ止まらざるの固り其の所也

館文隆會合目丁一町張尾區橋京市京東元兌發  
社資 (番六八五二橋新話電)



書圖刊新館文隆

小栗風葉君新著

口繪宮川春汀君筆

再版  
出來

新作  
小説

ま

寐

表装頗る斬新  
定價金五十錢  
郵税金六錢

文人悲劇を描き、深刻當に人をして涙に血べからしめざる『りまき寐』の一篇、材を狭斜の地に構て、一點卑猥の境に涉ら。却つて思ひ色巷の真相に潜め、悲惨な一娼妓の一生を描寫して、餘なし。憂き川竹の流れ偽の里に、却つて誠の戀ある郎の情薄うし紙の如く、之を弄て殆ど至らざる。若しそ憐むべき女が、深夜一指を斷ち流血淋漓、笑つて絶命の辭を記し來るに至つて、誰か妓女紫の悲命に泣き、作者の筆の鬼氣凄然に驚んや。其の間意氣あり、張り、達引あり、痴情あり、嬌態あり、或は凄婉或は悲慘、作者の筆は境と相俟つて、姿態百出、長に盡さざるも、若し明治の狭斜文學に一新紀元を劃するもの即ち此の書

發兌元 東市橋區張一丁目合資會社 隆文館 (電話新二五八六番)

書圖刊新館文隆

文壇近來の傑作

廣津柳浪君新作

宮川春汀君畫 ● 口繪木版

三版好評

小説  
をとこ  
氣

全一冊  
クローム金銀刷  
製本體裁頗美麗  
定價金六十五錢  
郵税金八錢

柳浪先生は文界の鉅匠なり、凄慘なる其の筆致、深刻なる其の構想、長く明治文界に其比を絶ちて、著作界の珍となれるもの茲に久し、先生時勢に感ずる所ありて冥想靜思、頃來一篇の著作をなす「をとこ氣」即ち是れ也、其の構想の痕、後かに平生の諸作を抽きて、興趣泉の如く湧き、文情秋の如く悲しきは云ふ迄もなし、殊に筆を現代の思潮に着けて、かの社會主義者を拉し來り、之を文るに人情の轉變、社會の表裏を以てするところ、獨り現代小説中の一異彩たるのみならず、群評家が永く渴仰して、其の顯出を要求しつゝある所謂時代思潮を描寫せる作物として、殆んど幾微に觸るゝに庶幾きものあり、殊に頭卷に置かれたる論文は、以て先生の用意が常に那邊に存するかを見るに足る。即ち茲にこの一篇を捧げて、謹んで廣く天下の批評を求むる所以。

發兌元 東市橋區張一丁目合資會社 隆文館 (電話新二五八六番)

書圖刊新館文隆

說小訓教の式治明

本讀好の女子年青紀世十二

版四評好大

黒法師君著 ● 宮川春汀君畫 ▲ 眞個の家庭小説 ▼  
 説小  
**新**  
 細  
**君**  
 の婚  
 卷禮

總クローヌ製本金銀文字人意匠斬新  
 定價五拾錢郵稅六錢

杜鷄を獨り飼ひて絶えて牝鷄に交らせぬ結  
 果は冠頭黒く光澤を失ひて遂に盲目とな  
 るとぞ。生殖は天授の妙機にして結ばる人  
 生の大義なり。東京第一の花と謠はれたる  
 薫子が年来の主業なる身主を棄てたる  
 るは不思議ならぬ才を得業生に肩書を  
 くる世に羽振りよき子に乳配を夫と結  
 見るからに恐しき者此疑問を解いて結  
 きし心ぞ訝しき。著者此疑問を解いて結  
 の忽せにすべからざるを教へぬ。戀に  
 人。夫を戀ふ人讀みてこれに温かき慰  
 得よ。

會合目丁一町張尾區橋京市京東  
 社資 (番六八五二番新話電) 元兌發

書圖刊新館文隆

來出版五第<sup>しに切</sup>版四參再初

新作  
 小説  
**相**  
 思  
**怨**

草村北星君作

● 口繪木版四十度美人<sup>宮川春汀</sup>

クローヌ金銀刷  
 製本體裁極優美  
 定價七十五錢  
 郵稅金八錢

不用意なる戀愛が齎らす悲惨なる結果を如何にして避  
 くべきか。戀愛に要する道義的努力の價值如何一時の  
 狂熱に伴ふ永劫の苦痛を豫想し得ざるは斷じて思慮あ  
 る士女にあらず。著者は此見地に立ちて此篇を作せる  
 が如し。醜惡なる寫真小説に飽きて醇雅清新なる愛情  
 の福音を希求する青春の士女は試に一本を手にしよ更  
 に家庭小説として適切なるは世評に聞け

館文隆 町張尾區橋京市京東 元兌發  
 地番一目丁一

書圖刊新館文隆

病戀愛

全一冊  
表裝頗る斬新  
定價金六拾錢  
郵税金六錢

德田秋聲君新著 ● 口繪宮川春汀君筆 木版四十度刷極美  
戀する男は愚人の如く戀せる女は天使の如しと戀の始は蜜り甘し其終りは膽汁り  
苦いとも 今秋聲子の新著にして病戀愛といふも戀愛の苦痛と憂愁と  
はその愉快と幸福とより大にして、やゝ人生の光明を蝕し戀る男女を驅  
つ絶望の淵に赴かしむ暗示せんがためならざる 苦痛の憂愁の裡にほほめ喜  
悦存し寂寞なる人生を彩るは戀愛の眞味なり非戀愛の遺産は後悔なり  
と箴言のみが千古不磨の眞理なりといひ得 一部病戀愛は疑惑  
を解決し餘蘊なきも人生の花に憧る諸人の必ず讀らざる可書也

(好評再版)

館文隆 東京市橋區尾張町一丁目 元兌發

書圖刊新館文隆

家庭次郎島

全一冊  
總クロース  
金文字美本  
正價七拾錢  
郵税金八錢

渡邊霞亭君作 ▲ 夏期の好讀物!!! 家庭小説の白眉  
大好評再版 ● 口繪木版四十度刷 宮川春汀君畫  
幼に孤り繼母の手りて虐待せら 何等の悲惨な少女の友愛の情  
に富み異母兄の業務を助く何等の可憐な途に悪漢に要され誘拐  
せら 何等の痛恨事や齡纒に十有一敢て少女を尋ね旅程に上る  
何等の殊勝な這般の勇氣や這般の決心や這般の精神や是れ我  
國少年凡の者の脈管に流れて止まざる者現はば好箇の機會のみ著  
者は關西文壇の雄鎮にして筆致奔放人を動かす力に於て最も富む今  
如上の事實に想を構へ舞臺を廣く全世界に取り一編の立志譚  
か化して小説となす 興國の氣運に際會する殊に將來大に爲んとする少  
年男女及び父兄母姉たるは必ず讀まざるべからざるの書  
也

館文隆 東京市橋區尾張町一丁目 元兌發

書圖刊新館文隆

再版

海賊大王

稻岡奴之助君新著 宮川春江君畫 ▲口繪木版四十度刷

金銀模様入美本  
クロース新装釘  
定價金六十五錢  
郵税金八錢

云ふ莫れ、戦争文學に傑作なし、茲に『海賊大王』あり矣、海賊大王は膽大斗の如き日本男兒、之を扶はる妖艶芙蓉を欺く傾國の美人也、對照已に奇り結構た焉、奇なり、忽てし、艦鐘千隻、波掀り、風吼え、忽てし、砲聲雷の如く、天下殷々、忽てし、甲板に銃眼を手にすの巨大漢、忽てし、刀身霜と凝る日本刀、猾露の肝膽爲に寒く、死鯨の如き敵艦蒼波に沈む、蒼天再び麗かに檣頭掲げ出さる日章旗、想を構ふる壯てし、偉る已に斯の如きもの、況んや著者か得意の筆鋒は、壯に可に、細に可に、織に可に、大に可なる、文情亦た燦爛とし、火の如く錦の如し、之を讀ば懦夫起つ猶躍る、眞に日本魂の眞粹を發揮て、我國の爲に氣燄を吐く、千萬丈

館文隆 會合 町張尾區橋京市京東 元兌發

書圖刊新館文隆

士學文  
著生先智玄藤加  
話講教宗

刊新

全一册製本

思ふ人生の歸趣に潛むれば、倏ちにして疑念百出ず、理智に依てこれ  
が解決を求めんと欲する者は、藝術の死に向ふべし。しかも遂に宗教の摩訶  
不可思議、玄妙の哲理と、至純の生情趣とを該れ具へたるに如かざる  
也。本書は學痕該博、識見高邁なる加藤玄智生が、由來高尙にして深  
遠なる宗教の理の、動もすれば專門家以外の人士に徹底せざらんとなす  
るを慨かれ、極めて平易、極めて簡明、極めて丁寧親切に講述せられ  
たるもの。凡そ世路の險惡に泣き、人生の酸苦に悩める人士は、これ  
に依て解脱向上の縁を得べく、一般人士はこれに依て信仰道念の鞏固  
を圖るを得べし。

全一册製本 泰西新形極美本 定價金九十錢 郵税金

士博學文  
著生先翼嚴木桑  
學哲と代時

評好大版再

全一册製本

一代之思潮を率ゐて高邁深遠の言議肺腑を貫く。混濁せる今の時に當て懊惱するもの苦悶するもの泣く者笑ふ者世を擧げて悉く此の書を讀まざるべからずこれ唯一時代精神の批判書なれば也。而して著者は新興國青年の指導を以て任ずるの人桑木嚴翼先生なり

全一册製本 泰西新形極美本 定價一圓廿錢 小包料

館文隆 會合 町張尾區橋京市京東 元兌發

書圖刊新館文隆

版十 精力主義

黒岩涙香先生著

著者黒岩涙香先生が信ずる所のニホルギズムは、今後の日本國民の必す奉ぜざるべからざる主義にして、先生の哲學は戰闘的哲學也進取的哲學也雄飛的哲學也大國民的哲學也精力主義也向上主義也之れに依らずして日本國民は世界に覇を唱ふる事能はざる也。世上志ある者は此書を讀まざるべからず敢て薦む。

洋装全一冊美本  
定價金四十八錢  
郵税八錢

版四 日本海賊史

萬朝報記者 伊藤銀月君新著

著者バイロンの海賊主義は起れり、諸君は既に主觀に對して、新に銀月の海賊主義を讀むべし。今又銀月氏が如何に海賊を詩化する可らず、一編の海賊史の上は神代の英雄伊藤伊呂波二君の和民族の歴史を一面より觀察して、眼を一新するの文字が活躍せしむる。高き詩感、要する所の評家所謂赤血球の結晶なるもの。

洋装全一冊美本  
定價金五十一錢  
郵税八錢

無名氏編纂 萬朝一口噺

定價二十錢郵税四錢

『萬朝』の一口噺は天下の珍其の文字の通り只一口噺ても其の中に千言萬語の趣が盡されて居つて馬鹿らしくつて、可笑しくつて迎も堪えぬ寄席へ行つて落語を聞かうより先づこの書一冊を讀み玉へ、高尙て無邪氣て面白いもの、恐らくこれほどのものが又とあらうか御注文は何百萬でも笑つてこれに應じます

大好評再版出來

館文隆 會合 町張尾區橋京東 地番一丁一

書圖刊新館文隆

當世一百人

萬朝報 伊藤銀月君著

社會百方面の特色ある人物を網羅す有名あり無名あり正人君子あり毒婦惡漢あり畸人變物あり山師泥棒あり英雄あり美人あり觀察奇警にして筆鋒の犀利なるを特色とする現代の寫眞鏡也

定價一冊各金貳拾錢

郵税金四錢宛

館文隆 會合 目丁一町張尾區橋京東 社資番六八五二橋新話電地番一

▲第貳卷好評▼▲第參卷新刊

# 告廣刊新館文隆

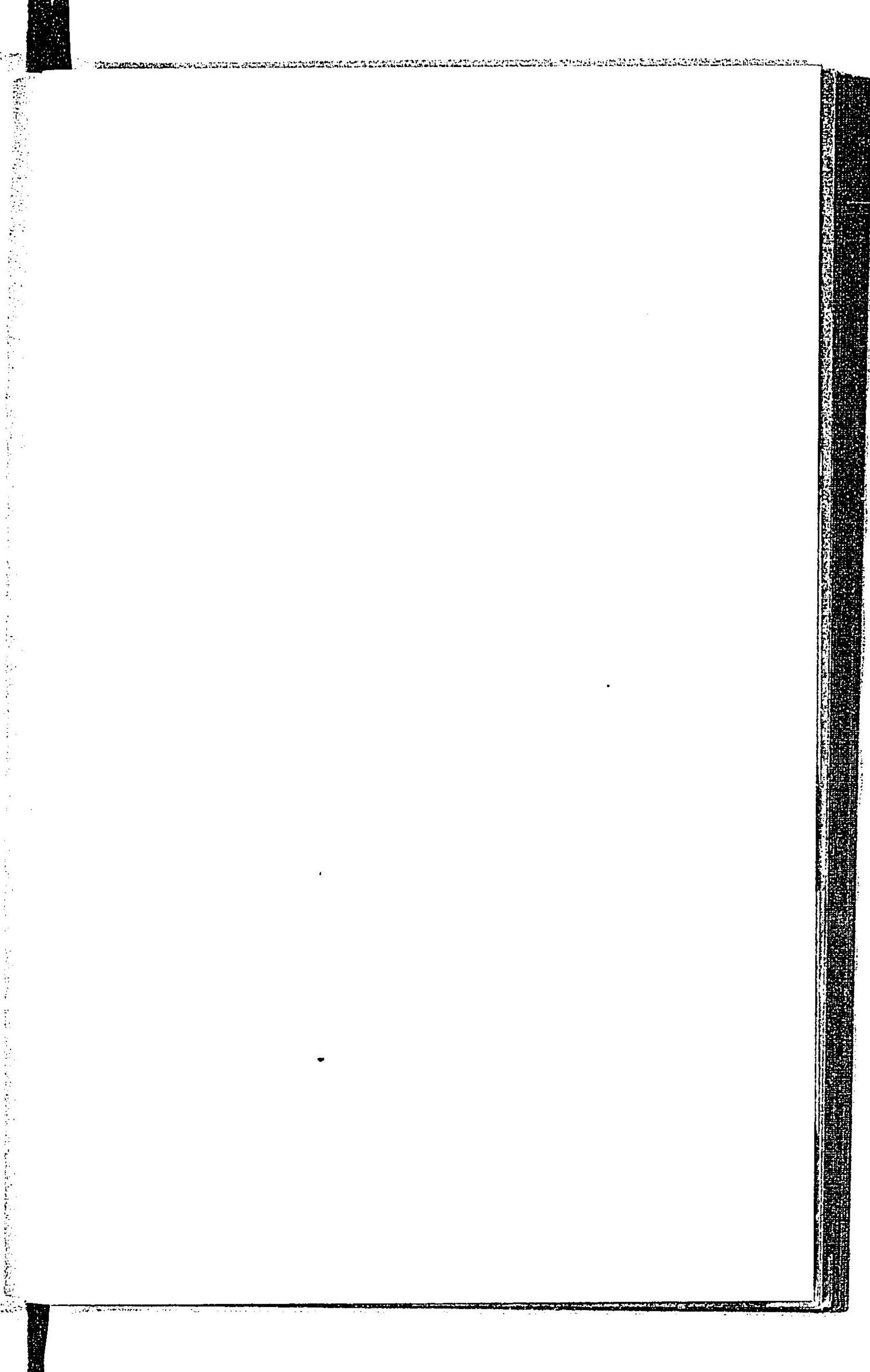
田中吟翁著新著

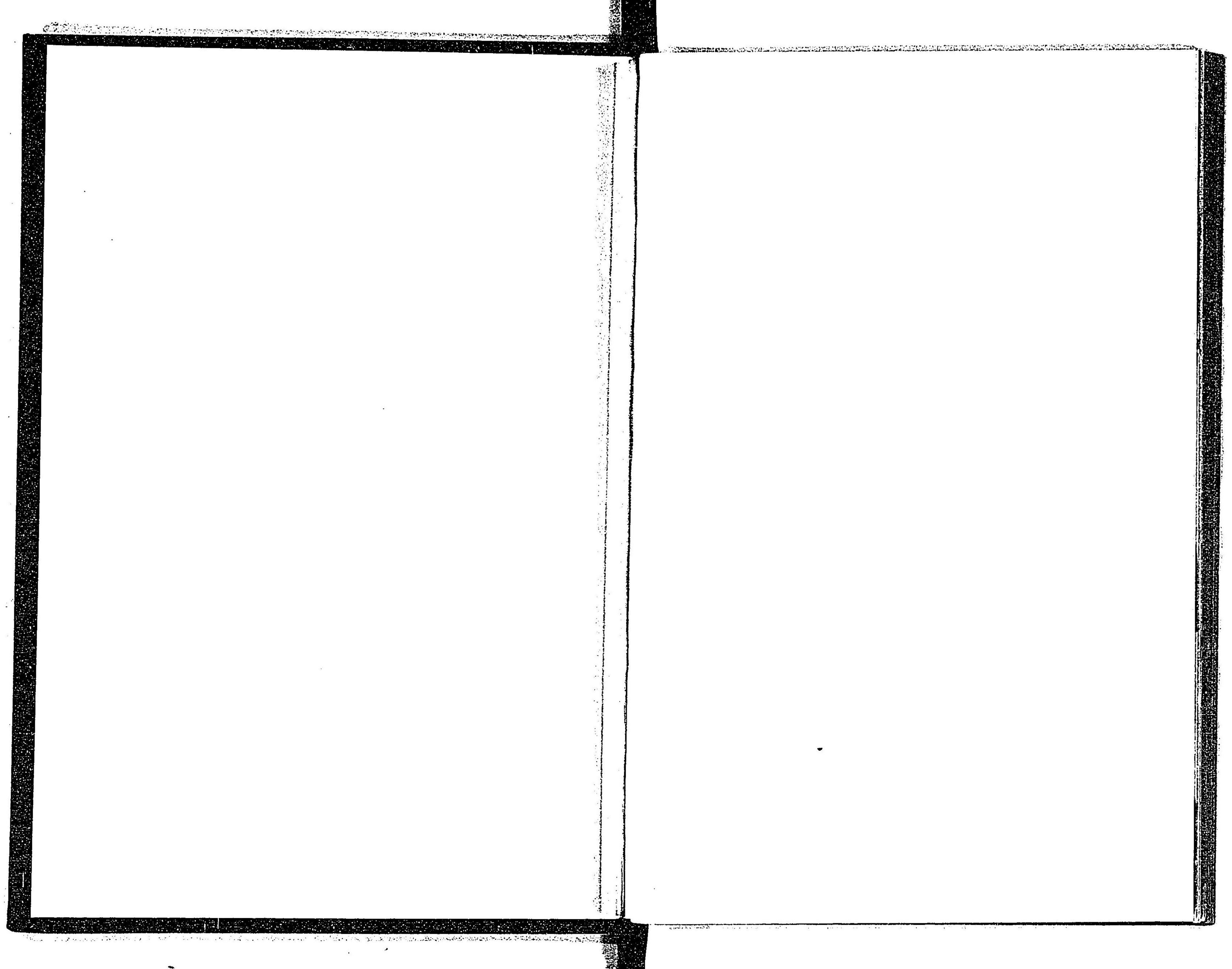
## 紀行 文集 草 枕

四六版總クロイヌア  
紙數三百餘頁  
定價金六拾錢  
郵税金八錢

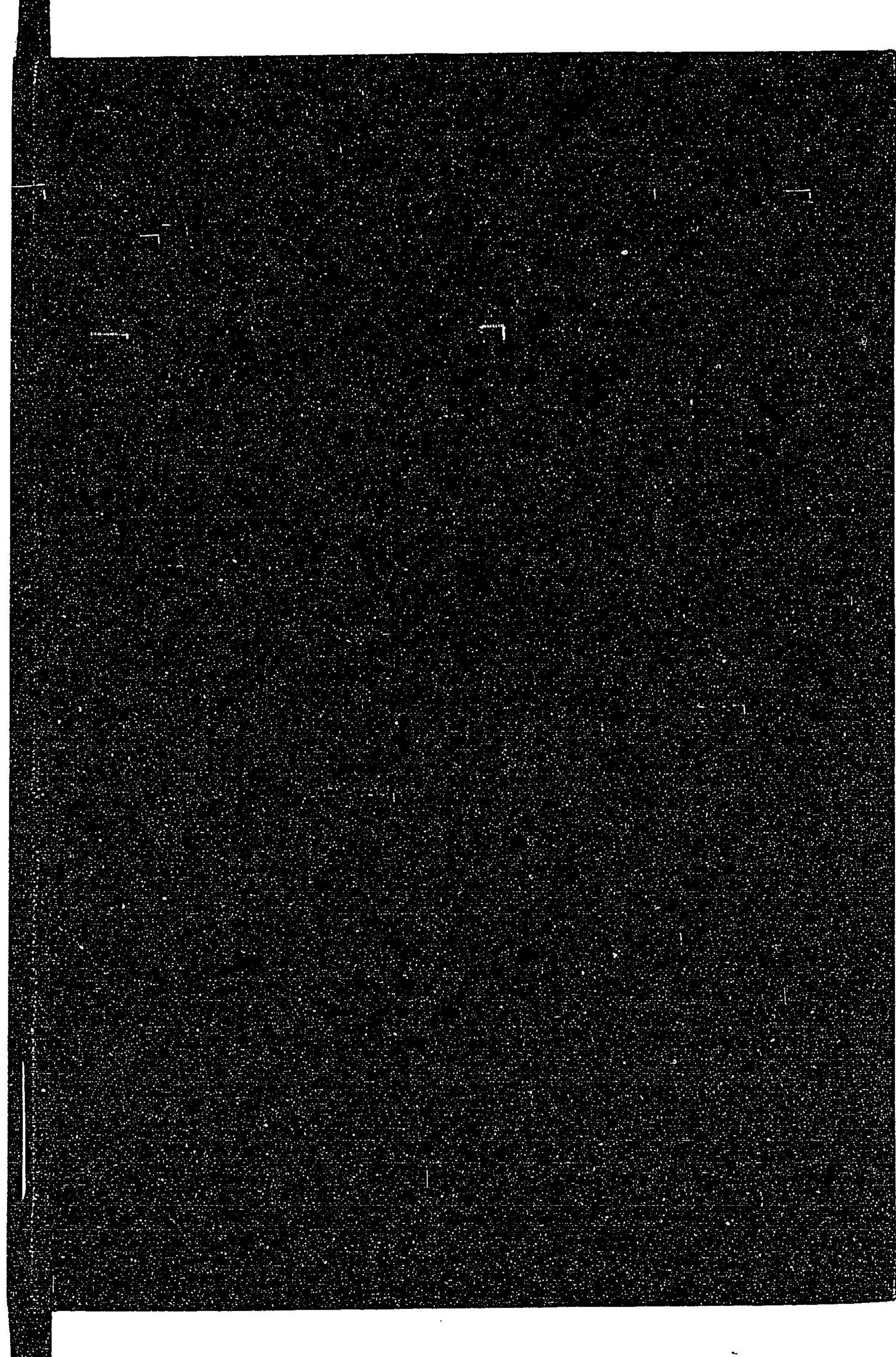
花袋君旅行家として足跡天下に洽ねく紀行家として文名天下に鳴る抑も其  
文たるや、多情多恨は深く西の國の詩人の節を寫し、趣の流麗にして情新  
なるは見る人をして巻を措くに忍びざらしむ。君ちかごろ一笠一笥、青山  
白水を踏破したる憂き悲しき哀れなる夢の跡を集めて名さへ其の儘に「草  
枕」と命じ一卷を遠く詩神の靈に捧げんとす或は蒼海の渺茫たるに我想の  
遙けさを悲しみ或は荒草離々たる墓畔に杖を留めて村野の深秋に泣く、一  
幅の山水畫は直に是山水詩、詩心、哲眼、山美、水容相錯綜し相照映して  
姿致長へに盡さずこれを讀めば感湧くこと雲の如く涙下ること雨の如し未  
だこれを讀まずこれを編かざる者は共に風景と詩美とを語るに足らざる也

館文隆(番六八五二橋新話電)地番一  
目丁一町張尾區橋京市京東元兌發









99

106

022758-000-8

99-106

日本山水論

小島 鳥水/著

M38

ADB-0554

